

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ①

—— 前史 ——

会員の思いと、その時代が生んだ奨学金

戦後、市民がいまだ救援物資に頼る生活をしていた1949年、東京ロータリークラブ（RC）を皮切りに京都、大阪、神戸、名古屋、静岡、札幌などが国際ロータリーへの復帰を果たしました。そこでロータリー財団の奨学金事業が広く実施されているのを目の当たりにした彼らは、「日本のロータリアンもせめて日本にいる外国の留学生諸君をとときどき慰めてやるような催しはできぬものか」（第60区1952－53年度小林雅一ガバナー『ガバナー月信』から）と考えるに至ります。戦後なお、国際社会における日本への警戒心、反日感情は強く、アジア諸国との友情こそが、今後の日本の生きる道であるという認識がありました。

1952年12月、東京RCが「米山基金」の構想を発表。アジアから優秀な学生を日本に招き、勉学を支援しようというものでした。これが現在の「ロータリー米山記念奨学金」の原点です。当時、すでに米山梅吉翁は亡くなっていましたが、日本のロータリーの誕生に多大な功績を残した米山氏の名を刻み、“無形の金字塔”とするにふさわしい事業であると考えられました。翌年、寄付の呼びかけを始めましたが、寄付者の第1号は東京RCの会員ではなく、例会の常連ビジターだったウィリス A.

ネルソン氏（アメリカ・バージニアRC会員）でした。

最初に支援を受けた奨学生、タイのソムチャード・ラタナチャタさん、インドの P.K. イーペンさんと A.B. ロイさんはいずれも東京大学で学び、それぞれの母国へ成果を持ち帰りました。

5 年後には全国組織に発展

東京RCによる米山基金は、構想当初から全国組織化を視野に入れており、1956年10月の第60・62区の年次大会において、この事業を地区内全クラブの合同事業として継承すると決議されました。

「ロータリーが貢献することのできる最も大なるものの一つは教育的援助であるが（中略）このような企画は貴いものであり、かつロータリーの国際奉仕として最もふさわしい^{くわだて}企であって、その連続性が望ましい。（中略）よって本大会は、米山奨学資金を財団法人として、全国的な組織となすべきことを茲に決議する」（第60区の大会決議文）

57年には全国組織「ロータリー米山奨学委員会」が結成され、翌年、初の選考試験を行って、全国の大学から8人の奨学生が採用されました。その出身は、バングラデシュ、ベトナム、インドネシア、フィリピン、香港、イラン、スリランカ、タイという国際色豊かなものでした。



ソムチャードさんのご子息
ノラチャート
・ラタナチャタ さん

父は生前、日本の東京大学を卒業したことを、とても誇りにしていました。東京大学で学んだ知識を生かし、養蚕^{ようさん}センターを設立して、多くのタイ人にその技術を教えました。父は、日本のロータリアンにいつも親切に助けていただいた、と私たち家族に話していましたし、留学時代の写真もたくさん見せてくれました。

幼い頃、父の日本人の友人が仕事でタイに来て、私に日本語を教えてくれたことがあります。以来、私も日本に関心を持つようになりました。何度も日本を訪れ、日本と日本人が大好きになりました。



写真の左から
2人目がソム
チャードさん、
3人目がイー
ペンさん



財団設立 50 周年を迎えたロータリー米山記念奨学会。今年度の「よねやまだより」は 10 年ぶりに、これまでの歴史を振り返るシリーズをお届けします。今月は、当事業の前身、東京ロータリークラブ（RC）が始めた「米山基金」時代について。戦後の日本のロータリーの状況から基金創設に至るエピソードのほか、当時の奨学生に関わりのある方々から話を伺いました。



東京上野 RC 会員
2016 - 17 年度
第 2580 地区米山奨学委員

外山 昌一 さん

地区米山奨学委員を引き受けた際、少しは米山の勉強でもしようかと米山記念奨学会発行の『豆辞典』を開いたところ、私を育ててくれた大叔父の写真、イーペンさんの懐かしい笑顔が目飛びこんできました。そりゃもう、びっくり仰天ですよ。

大叔父はミツフ石鱈（株）の 2 代目で、三輪善兵衛（みわぜんべえ）といいます。1953 年に日本でテレビ放送が始まるといち早く CM を流し、それが大当たりして財を成しました。東京 RC のの会員としてロータリー活動に精を出していた姿も、おぼろげながら覚えています。

小学生の時、家に肌の色の黒い外国人がやってきて、書生のような形で一緒に住むことになりました。それがイーペンさんです。女性の多い広い家だったので、用心棒の意味合いもあったのかもしれません。当時、外国人といえばアメリカ人のことだと思っていた私は、初めて見るインド人にくぎ付けでした。

イーペンさんは日本語がペラペラで、週に 1 回、

カレーを作ってくれたことが記憶に残っています。それも、当時普及しつつあった西洋風カレーライスではなく、母国から持ち込んだ香辛料をふんだんに使った本格インドカレー。スパイスの香りが近所中に漂い、学校から帰ってくると、家の 500m 手前から気付くほどでした。同居生活は 1～2 年で終わりましたが、イーペンさんは帰国後、母国の水産庁に就職したと聞いています。今でもインドに親しみを感じるの、彼のおかげかもしれません。

大叔父たちが戦後の日本で立ち上げた米山記念奨学事業に、今、私自身が同じように関わっています。そこに不思議なつながりを感じます。奨学生たちの研究レベルの高さ、学業への真摯な姿勢、日本人顔負けの礼儀正しさを見るにつけ、われわれの活動が無駄ではないと実感します。

事業設立から 65 年、財団設立から 50 年、この長い歴史を、これからもわれわれロータリアンの手で担ってきたいものです。



三輪善兵衛氏

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、（公財）ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま ミニだより

「感謝 in 熊本」に学友・ロータリアンら 444 人が参加



サプライズで、くまモンが登場

「世界米山学友による感謝 in 熊本」（米山学友合同実行委員会主催）が 8 月 26 日、熊本市内で開かれ、世界 18 の国・地域の米山奨学生と学友 197 人、ロータリアンや家族など総勢 444 人が参加しました。当会の財団設立 50 周年への祝賀に加え、今後、国内外の学友・学友会が連携するためのプラットフォーム「世界米山学友会」の発足を目的としたもの。「被災地を元気づけたい」との思いから熊本で開かれ、当日は第 2720 地区に義援金 100 万円を贈りました。懇親会では民族舞踊や合唱が披露され、サプライズで、くまモンも登場。「手に手つないで」を全員で歌い、再会を誓って閉幕となりました。次回は 2 年後、モンゴルでの開催を予定しています。

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ②

—— 1960 年代 ——

一人でも多くの奨学生を

1957 年に結成された「ロータリー米山奨学委員会」には、第 60 区と第 62 区から計 12 人の委員が参加。委員長は小林雅一氏（東京 RC）が務めました。その委員会では、奨学生の募集・選考をはじめ、さまざまな案件が検討されました。そのうちの一つ、会の名称は 60 年 3 月 30 日に同委員会から「ロータリー米山記念奨学会」に変更され、以降、この名称が受け継がれています。

また、委員たちを最も悩ませたのが、財政の問題。「一人でも多くの奨学生を」との思いが先行した結果、寄付金収入をはるかに超える支出が見込まれたのです。しかし、それを一挙に解消する出来事が起こります。61 年 5 月、アジアで初となる国際ロータリー（RI）国際大会が東京で開催され、これを機に会員が増え、新クラブが次々と誕生しました。その追い風を受けて米山記念奨学会への寄付が増えたのです。

この東京大会を招致し、成功に導いた立役者は、1957 - 59 年の国際ロータリー（RI）第 1 副会長を務めた小林委員長でした。ようやく危機を脱した米山記念奨学会は、63 年から財団設立のための基金の積み立てを開始。しかし 66 年 2 月、事業をけん引してきた小林委員長が急逝。副委員長だった田誠氏（東京 RC）がその後任に就き、悲しみを力に変えて、小林氏の悲願でもあった財団法人設立に向けてまい進しました。

名実ともに日本のロータリーの合同事業に

財団化への道のりは厳しいものでした。その最たる理由は、通常の財団が基本財産の運用益などを財源とするのに対し、毎年の寄付金収入に頼る米山記念奨学会の提案が、「奨学金支給に関わる一切の支出を、財団はあらかじめプールしておかなければならない」とする当時の文部省には受け入れ難いものだったからです。

67 年 2 月 1 日に設立発起人総会を開催し、文部省に申請するも、安定財源を求める同省との調整は難航。5 月 22 日付で田委員長から文部大臣宛てに提出された文書には、「全国ロータリークラブの合同事業として推進されており、財団法人の認可後も全国的寄付は継承され継続すべく確信する」として、普通寄付金により毎年 2,200 万円以上の収入が見込める、と力説しています。この説得が実を結び、国内全クラブが寄付金を確約することを条件に、ついに 67 年 7 月 1 日付で許可が下り、「財団法人ロータリー米山記念奨学会」が誕生。ロータリアンからの浄財から積み立てられた 3,000 万円を基本財産とし、当時の全地区から理事・監事の役員を迎え、田氏が初代理事長に就任して、米山記念奨学事業は、名実ともに、日本のロータリーの合同事業となったのです。

なお、その年の奨学生数は 59 人。1959 年から正式採用された「世話クラブ制度」のもと、奨学生はロータリアンたちとの交流を深めていったのです。

米山学友

リュウ イツミン
劉 逸民 さん

出身：台湾

奨学期間：1961 ～ 63 年

学校名：北海道大学大学院

世話クラブ：札幌 RC

私は札幌 RC で最初の米山奨学生（写真＝当時）と

なりました。例会ではクラブの皆さんと会話し、何かと親切に気を配ってもらい、大変ありがたかったのを



覚えています。

北大では植物学研究室に在籍して、採集や調査で道内の山や沢、湿原といった大自然を歩き回りました。卒業後は東京で 26 年間教職を務めましたが、学生時代に良き師、良き友に恵まれ、加えて米山奨学生として過ごした 2 年間は、何物にも代え難い思い出です。

長きにわたりこの事業を支援してきたロータリアンには、心からお礼を伝えたいと思います。いずれ学舎を巣立って社会のために働く青年たちにとって、皆さんの心遣いは何よりの支えで、尊い一言に尽きます。今後、ますますのご尽力を切に願います。

事業開始から5年後、全国組織を立ち上げ、始動した米山記念奨学事業ですが、目標とする財団化の実現にはさらに足かけ10年の歳月を要します。その間、並々ならぬ情熱で、課題を一つ一つ乗り越えていった当時のロータリアンたち。その原動力となった思いは何だったのでしょうか。今回は、悲願の財団法人設立を成し遂げた1960年代を取り上げます。また、財団設立当時の理事・伊藤義郎氏と、所属する札幌ロータリークラブ（RC）で最初の米山奨学生となった劉逸民さんからお話を聞きました。

2017-18年度は
財団設立50周年



札幌RC会員
1967 - 71 年度
米山記念奨学会理事
伊藤 義郎 さん

私の父（伊藤豊次氏）は「ロータリー米山奨学委員会」時代の常務委員だったそうです。今思えば、父は奨学事業というものに、特別な関心を持っていたのかもしれない。後に国連難民高等弁務官となる緒方貞子さんが学生の頃、彼女にロータリー財団の国際親善奨学金を勧めたのが父だったと聞いています。

私は米山記念奨学会が財団化された当時の理事を務め、その後、1986 - 88 年度にRI理事、89 - 92 年度にロータリー財団管理委員を務めました。米山に関して、強く心に残る思い出があります。

財団管理委員だった頃、その委員会で米山の話題となり、「ロータリーの名前で寄付を集めてよいのは財団だけなので、やめさせるべき」という話になりました。日本に帰って、当時の米山記念奨学会理事長だった湯浅恭三さんに伝えたところ、「日本のロータリーの創始者である米山梅吉さんを記念した大事なプログラムなので、何とか説得しようじゃないか」と。それで、

私は再度アメリカに赴き、発足の経緯や趣旨をRI会長と事務総長にじかに説明しました。最終的に、イギリスのロータリーにも米山のような財団があると分かり、当時のRI理事会と財団管理委員会で、米山とそのイギリスの財団の2つは認めよう、ということになりました。こうして日本独自の、ロータリーの奨学事業として認められたわけで、これは米山の歴史にとっても、大きな一歩であったと思います。

私は近年、米山への寄付を毎年続けています。その時々思いつたように寄付をするよりも、可能な範囲で続けていくのが良い、他の人にもそう勧めたいと思ったからです。戦後、米山梅吉さんを記念して何か始めようとした時、奨学金を通じて新しい日本をアジアの人たちに知ってもらおうと考えたのは、本当に良かったと思います。相互理解を広げることにのみならず、これは継続すべき事業だと思っています。

1969 年の米山記念奨学会理事会



※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、（公財）ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

学力向上を願って成績優秀者を表彰 —— ミャンマー米山学友会 ——



勉学に励む子どもたちを表彰

今年2月に創立したミャンマー米山学友会が10月20日、現地の小中学校で成績優秀者への表彰式を開きました。表彰されたのは小学1年生～中学4年生の各学年成績上位者で、自転車や学用品を贈呈。学友会では、教育に熱心でありながら資金不足に悩む学校の窮状を知って支援を始め、9月には貯水タンクを設置するための寄付もしています。タンシンナイン会長（2003 - 05 / 東京調布RC、現・東京米山ロータリーEクラブ会員）は「こうした表彰は学校始まって以来のことで、大変喜んでもらえました。自転車を見た生徒は、信じられないという面持ちでした。これを機に勉学に励み、学力の向上につながればうれしい」と語りました。

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ③

—— 1970 年代 ——

カウンセラー制度の誕生

財団化を果たしたものの、専任スタッフもいないまま 2 年が経過しました。1970 年にようやく事務局開設のめどが付き、一刻も早く軌道に乗せたいとの思いから前倒しで仮事務所を開き、初代事務局長を引き受けたのが、米山記念奨学会常務理事（後に同専務理事）の塩原禎三氏（東京 R C）でした。塩原氏は改めて膨大な事務量に驚くと同時に、この事業に大きな将来性を見だし、事務局の仕事にしばらく専念する覚悟を決めました。

米山記念奨学事業の特長の一つ、カウンセラー制度が設置されたのも 1970 年でした。時は学生運動の最盛期、全国の大学で暴力的衝突が日常化していました。授業はしばしば中止され、困り果てた奨学生たちのため、特別措置として奨学期間延長が認められたほか、奨学生一人一人に相談相手をつけて困難を解決しようと始めたのが「カウンセラー制度」でした。1959 年に設置された「世話クラブ制度」と併せ、ここに事業の核となる「世話クラブ・カウンセラー制度」が整い、単なる経済的支援に終わらない“心を育てる国際奉仕”が確立したのです。

とはいえ、全てのクラブ、会員が奨学生と接することは難しく、寄付や奨学金の授受だけに終われば、いずれ不満

が噴出すると考えた塩原氏は、奨学生や会員の意見を載せた広報誌を発行し、表彰制度で会員の関心を高めるなど工夫を重ねました。しかし 1974 年秋、今に続く制度の道筋をつけた氏は病に倒れ、帰らぬ人となりました。

学友会結成に向けて

1978 年には、初めて特別寄付金が普通寄付金を上回り、同年、特別寄付金に対する免税措置が認可されたことにより、さらなる寄付の促進が図られました。この年、奨学生の採用数は年間で 20 の国・地域から 239 人、累計で 1,103 人となりましたが、その半数以上が台湾出身者、次いでベトナム、韓国の順で、まずはこれらの国・地域での同窓会組織誕生が望まれるようになりました。

台湾では、台北市のロータリークラブの世話で何度か結成の動きがあったものの、正式な発足に至らず自然消滅。1979 年には韓国・ソウルで国際ロータリー（R I）のアジア地域大会が開催され、日本から参加した会員のために韓国の学友が歓迎会を主催し、一同を感激させました。これを契機に韓国でも同窓会組織が一時結成されたようですが、政情不安により立ち消えとなってしまいました。しかし、この後 80 年代に入り、国内外で同窓会組織、すなわち学友会結成の動きが本格化するのです。

東京 R C 会員
1967 - 70 年度
米山記念奨学会常務理事
1970 - 74 年度
米山記念奨学会専務理事
故・塩原 禎三 さん

（以下、1970 年 3 月発行、月刊『よねやま』第 5 号から抜粋）



この事業は、奨学生、指導教官、世話クラブ、そして全国のロータリークラブが一体となって初めて成果を挙げるものである。もし、そのままに放置されたとするならば、三者の間には、数少ない例外を別とすれば、血が通うことなく終わるであろう。それはまた、

ロータリーと米山奨学事業を疎遠にし、奨学会は何をしているのだという非難は、各地のロータリークラブの不満となって、その離反をすら予想されるものであった。

みんなで考え、みんなで動くために、意思の疎通を図り、情報を交換するためにパイプを敷くことを考えた。少しずつパイプが敷かれるごとに、事業がそれだけ生々として動くことを発見した。自信があるわけではない。しかし、連絡役ぐらいは務まりそうである。連絡が密になり、関係者の間に共通の場ができ、有機的活動が可能になれば、米山記念奨学事業は一人で成長し、所期以上の目標を達することができよう。米山奨学事業は前進する。そして、真に、日本のロータリアンの誇りとなるべき事業に発展を期している。



カウンセラー制度や表彰制度、免税措置など、1970年代は現在に続くさまざまな制度が整えられました。奨学生数の増加に伴い、学友会づくりへの機運が高まったのもこの時代です。今回は財団法人設立後、この事業を血の通ったものにしようと、事務局や運営方法の整備に尽力した塩原禎三氏の思いを、当時の資料から伝えるとともに、塩原氏と交流のあった米山学友、ロバート B. レフラーさんにお話を聞きました。



米山学友
アーカンソー大学法科大学院教授

ロバート B. レフラー さん

出身：アメリカ
奨学期間：1973～74年
学校名：東京大学
世話クラブ：東京神田 R C

私は米山学友で、財団学友でもあります。アメリカのハーバード大学を卒業後、ロータリー財団国際親善奨学金を得て1972年に来日。その際、日本でも著名なエドウィン O. ライシャワー元駐日大使の推薦状を持ってきたためか、ロータリアンに大変温かく迎えてもらった上、研究を続けるために米山奨学生に推薦してもらいました。東京での2年間、何かと私の面倒を見てくれたのが、塩原禎三さんでした。製薬会社の御曹司であり、プリンストン大学卒の塩原さんは、同大のアメリカンフットボールチームがハーバード大に勝利するたび、得意げに私をからかったものでした。

大相撲が始まると、塩原さんは友人と一緒に帝国ホテルのバーでテレビ観戦するのが常でした。私も何度か誘ってもらい、すっかり相撲好きになりました。当時、初のアメリカ出身の幕内力士・高見山が活躍しており、私は彼の大ファンでした。

奨学期間中、アメリカの政治動向に関するNHKの

公開討論会に出演しました。ベトナム戦争中であり、私は母国の戦争政策を強く批判した上、ウォーターゲート事件にも言及しました。私が話している時に「ロータリー」の文字が表示されたらしく、後日、塩原さんから「ロータリーが支援する奨学生として、あのような場で政治的見解を示してはだめじゃないか」と叱られました。しかし、平和と正義に基づく主張は臆せずしていかなばならないと、今も思っています。

帰国後、私はハーバード大学法科大学院に戻りました。ワシントン D. C. の公益団体で弁護士として働いた後、故郷に戻り、アーカンソー大学の教授として今も教鞭を執っています。日本とは今も結びつきがあり、東京大学などで研究・教育に関わっているほか、アメリカの各大学などで日本語の講義も行っています。充実したキャリア、多くの日本の友人を得たことに心から感謝しています。ロータリーと日本との縁が私の人生の進路を決めてくれました。どうかこれからも、世界の若者の勉学を助け、国を超えた交流に手を貸してください。



昨年11月、台湾での会議を終えて

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、(公財)ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

イアン H. S. ライズリー R I 会長夫妻が米山学友らと懇談



ライズリー R I 会長夫妻(前列中央)とともに

ロータリー研究会最終日の11月23日、イアン H. S. ライズリー R I 会長夫妻と米山学友、ロータリー平和フェローとの懇談会が開かれました。米山学友からはアメリカ出身のコリーン・シュムコーさん、中国出身の于咏さんと包翠芳さん、ネパール出身のバタライ・ビノドさんの4人が参加し、米山記念奨学金が学業達成の大きな支えとなり、ロータリーとの出会いが現在の活動や目標につながっていると、R I 会長夫妻に伝えました。また、よねやま親善大使の于咏さんが当事業について説明。学友からの積極的な質問に対し、R I 会長はにこやかに答え、自身の考えなどを披露していました。

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ④

—— 1980 年代 ——

ロータリー所在国以外にも門戸を拡大

1980 年代に入っても、事業への理解を深めてもらうための取り組みが続きます。1975 年に 4 月 22 ～ 28 日の 1 週間を「米山週間」と定め、1980 年に 10 月 1 ～ 7 日に変更。1983 年には現在と同様、10 月を「米山月間」として P R を推進。その結果、寄付金は順調に増え、1987 年度には初めて 10 億円の大台を突破。寄付金の増加に応じて奨学生数も増え、1989 年以降、年間奨学生採用数は、500 人を超える規模となりました。

奨学生の増加には、在日留学生数が増えたという社会的背景もありました。1983 年、日本政府が 21 世紀初頭を目標にした「留学生受け入れ 10 万人計画」を発表。それに伴い、私費留学生の数は増え続け、奨学金への需要と期待は大きくなっていきました。同時に、財団発足以来、「ロータリー所在国」に対象を限っていた定款の見直しを求める声が寄せられるようになりました。

日本人 2 人目の国際ロータリー（R I）会長・向笠廣次氏（1982 - 83 年度）は在任中、「非ロータリー国からの学生を除外せぬように定款の改正を考慮中である」と言及。また、1986 年の大阪・第 266 地区の地区大会では、「ロータリーが所在しない国からの留学生にも奨学金を支給できるよう拡大を望む」との特別決議がなされました。こうした声を受け、対象拡大に慎重だ

った米山記念奨学会も、1989 年 4 月採用の募集から、中国、キューバ、ミャンマーなど、かつてロータリーが所在していた国からの留学生に門戸を開くことにしました。

各地で相次いだ米山学友会の発足

そのほか、最も大きな出来事は、元奨学生による同窓会組織、米山学友会が国内外に発足されたことです。

70 年代初め、台湾で学友会結成が図られたものの、当時は結社の自由が制限されており、立ち消えになっていました。しかし 1980 年、米山記念奨学会監事らが訪台し、学友を集めて連絡態勢を整えたことで再び機運が高まり、1983 年 1 月、台湾米山学友会（正式名称・扶輪米山会）が発足。台北で開かれた創立式典には、向笠 R I 会長からも祝電が寄せられました。

1985 年 11 月には、国内初の「米山奨学生学友会（関東）」が誕生。その後、関西、北関東、西日本にも次々と学友会が結成されました。

韓国でも 1989 年のソウル国際大会の際、湯浅恭三理事長（当時）はじめ米山関係者の歓迎会を開くため学友が集結。当日の参加者によって学友会結成の申し合わせがあり、同年、韓国米山学友会が設立されました。

このように各地で相次いだ米山学友会の誕生は、事業創設から 30 年の歳月を経て実を結んだ、米山記念奨学事業の確かな成果と呼べるものでした。



韓国米山学友会会長

ジョン・ビョンテ
全 炳台 さん

出身：韓国

奨学期間：1980 ～ 83 年

学校名：東北大学大学院

世話クラブ：仙台北 R C

写真・韓国学友会が支援する
日本人奨学生と

博士課程の 3 年半、米山奨学生として大変お世話になりました。学位論文の審査が通り、仙台北 R C の皆さんに祝ってもらったことは、忘れられない思い出です。帰国を前に、「私は必ずロータリアンになります」

と皆さんに約束しました。母校の建国大学食品生命科学科で 34 年にわたり教授を務める傍ら、2008 年にセソウル R C に入会し、ついに、その約束を果たすことができました。

2014 年からは韓国米山学友会の会長を務め、帰国学友の歓迎会や定期総会を通じて仲間を増やし、2016 年には学友を中心にしたロータリー衛星クラブを創立しました。また、台湾米山学友会に倣って、在韓日本人留学生への奨学支援を始めました。米山はとても意義ある事業で、お世話になった私たちはそのご恩を一生忘れません。微力ながら、私たちは今後も日本からの留学生を支援していきます。

米山の1980年代は“拡大と発展の時代”。寄付金と奨学生数が増え、ロータリー所在国以外に門戸を拡大、米山学友会が国内外に組織され、奨学期間後も学友とロータリーが連携する体制が整い始めました。その発展の陰には、事業への理解を深めようとする地区・クラブ単位での地道で熱意ある取り組みがありました。今回は、その一例として、当時の常務理事・増田房二氏の講演（抜粋）と、80年代の奨学生で、現在、^{ジョンビョンテ}韓国米山学友会会長を務める全炳台さんからのメッセージをご紹介します。

2017-18年度は
財団設立50周年



京都山科（現・京都東山）R C 会員

1977 - 89 年度
米山記念奨学会常務理事

1989 - 99 年度
米山記念奨学会副理事長

故・増田 房二さん

米山奨学事業は、米山さんがつくられたものでもありませんし、米山さんの物質的な寄付や遺産でできたものでもありません。敢えていえば、米山さんの心を受け継いだロータリアンによってつくられ、そして全国のロータリアンによって支持・運営されているものでございますので、その意味におきまして、米山奨学事業は、米山梅吉さんの精神的遺産であると私は考えております。

将来の日本の生きる道は平和しかない、その平和日本を世界に理解をさせるためには、^ま先ず何よりも、アジア諸国の理解を得なければならない、それには、アジアの国々から一人でも多くの留学生を日本に迎え入れて、平和日本を^{はた}膚で感じとってもらわなければならない、そしてそのために、ロータリー財団の奨学事業のように、^{しっか}確りした国際奨学事業を始めてはどうだろうか、それこそ日本のロータリーに最も^{ふさわ}相応しい、国際奉仕事業

ではないだろうか、そういう結論に達しました時に、期せずして思い起こされたことは、米山さんが生前に、如何に強く平和を愛したか、そして若き青年達に、如何に愛情のこもった援助の手を差し伸べておられたか、ということでございます。

米山さんのたぐいまれなる愛と平和の精神が、われわれの米山奨学事業に、永久に、しかも確実に受け継がれまして、これが世界に友情の橋を、いつまでも、これからも、どんどんかけていくことではございません。

私は昨年（2016年）の10月に、265地区の『ガバナー月信』に、次のような言葉を載せていただきました。

1. あなたは、米山奨学事業を推進することによって、人類の平和に貢献します。米山奨学金は平和の使徒を育てます。

2. あなたは、米山奨学事業を援助することによって、世界中に友情の橋をかけます。米山奨学金は、世界に友情の橋をかける建設費です。

3. あなたは、米山奨学事業に参加することによって、日本独特の国際奉仕を実践できます。米山奨学金は日本に相応しい国際奉仕の広場です。街のなかにも、海辺にも、山の麓にも、この広場があります。米山はあなたを待っています。

※以上、1983年2月24日、北見西・北見・北見東3 R C 合同例会の講演録『米山奨学事業の精神的原点』から抜粋。

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、（公財）ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

社団法人設立 20 周年の節目を迎えて —— 台湾米山学友会総会 ——



感謝状を手にした歴代の理事長たち

台湾米山学友会の総会が12月2日に桃園市内で開かれ、当会の小沢一彦理事長と役員、日本のロータリアンら41人を含む計150人が出席しました。社団法人設立20周年を迎えての今回の総会では、歴代理事長への感謝状贈呈や新会員の歓迎セレモニー、各種演奏が披露され、学友会が支援する日本人奨学生が流ちょうな中国語で、日頃の感謝を述べました。

学友会は^{ウーシェンツァン}呉憲璋理事長、^{チャンイーケン}張逸崑幹事長のもとで改革を進めており、今年度はより多くの学友が『会報』の編集に関わったほか、学友会のシンボルマークを一新し、当日はマークをかたどったピンバッジが全員に配られました。

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ⑤

—— 1990 年代 ——

うれしいニュースが続いた 10 年

好景気に支えられ、上昇ムードで幕を開けた 1990 年代、日本の会員は毎年、数千人単位で増加し、1996 - 97 年度に過去最高となる 13 万人に到達。これに比例して米山記念奨学会への寄付も増え、同年度の寄付金収入約 20 億 8,200 万円は、当奨学会史上最高額となっています。

そんな中、台湾・第 3480 地区では 95 年、米山学友を中心に、日本語を公用語とする新クラブ・台北東海ロータリークラブ（RC）が創立されました。創立会員 57 人のうち 13 人が米山学友で、初代会長には、のちに“台湾流通の父”と呼ばれる徐重仁さん（1976 - 77 年／平塚 RC）が就任。同年 4 月の認証状伝達式では、台北東海 RC から米山記念奨学会へ 50 万円もの寄付が贈られました。

韓国・第 3650 地区では、韓国米山学友会の初代会長を務めた林隆義さん（1977 - 78 年／京都西南 RC）が、米山学友として初めて 1997 - 98 年度のガバナーに指名されました。林さんは 1994 - 95 年度、国際ロータリーから「超私の奉仕賞」を受賞しており、2 度目のうれしいニュースとなりました。

また海外だけでなく日本国内においても、80 年代か

ら加速して、各地区に次々と学友会が結成された時期でもありました。

活発化する支援体制と次の時代に向けて

来日留学生が増えるにつれ、米山奨学生採用の枠を広げようという動きが活発化しました。90 年には奨学生の対象として“アジア諸国の”との文言が寄付行為から削除され、93 年には日本研究を専門とする若手研究者への特別奨学金制度がスタート。学部・修士・博士課程を対象とする通常プログラムにおいては、1999 学年度の採用から、ロータリー所在国か否かにかかわらず、全ての国・地域の留学生へと対象が拡大されました。

一方で、91 年のバブル経済の崩壊、95 年の阪神・淡路大震災といった不安要因が寄付額にも影響しはじめ、1,000 人超に急成長した奨学規模を維持するため、積立資産を取り崩しながらの継続へと、一転して資金不足に苦しむことにもなっていました。

そうした背景を受け、99 年には事業始まって以来のアンケート調査「第 1 期基礎調査」が実施され、ロータリアン、大学関係者から広く意見を求めることになったのです。より時代に即した奨学金プログラム、よりロータリアンの理解を得られる奨学事業に向け、模索は続いていきます。



米山学友
ジョ ジュウニン
徐 重仁さん

出身：台湾
奨学期間：1976 - 77 年
学校名：早稲田大学大学院
世話クラブ：平塚 RC

台湾米山学友会は 1983 年に発足し、97 年に社団法人となりました。今年度は法人となってちょうど 20 周年です。学友会をつくる前は皆バラバラで消息も分からない状態でしたが、結成後は一致団結。「日本留学」「ロータリークラブ」という同じバックグラウンドを持つ仲間だからこそ、他の団体にはない強い

結束力で、日本人留学生への奨学支援や、台湾の若手に日本留学を奨励するなど、有益な活動を続けることができています。

また、台北東海 RC は、日本のクラブと友好関係を保ちつつ、米山記念奨学事業の温かさを広く知らせることを目的に創立しました。現在、会員数は 46 人となり、「台北東海奨学金」をつくって、台湾で学ぶ日本人留学生を累計 3 人支援しているほか、日本人学校への協力なども継続して行っています。

私にとっては、日本で多くのロータリアンと知り合い学んだことを、いかに社会に還元し、いかに日台交流に力を尽くしていくか、米山奨学生・学友としての経験こそが、思考と行動の原動力となっています。

好景気で幕を開けた 90 年代。寄付額、奨学生数ともに過去最高に達した他、台湾では米山学友を中心とする新クラブ・台北東海 R C が創立され、韓国では米山学友初のガバナーが誕生するなど、うれしいニュースが続きました。一方、バブル崩壊から数年を経て、資金不足に直面することになったのも 90 年代でした。この頃のことについて、今回は台北東海 R C 初代会長となった米山学友・徐重仁さん^{ジョジュウニン}と、当時のロータリー米山記念奨学会事務局長・宮崎幸雄氏に話を伺いました。

2017-18 年度は
財団設立 50 周年



東京 R C 会員
1999 - 2005 年度
米山記念奨学会常務理事
1998 - 2005 年度
米山記念奨学会事務局長
宮崎 幸雄 さん

1997 年、当時の末永直行理事長、故・高野孫左エ門副理事長から「米山の事務局長を引き受けてほしい」と直々に請われた時は、正直悩みました。定年退職を前に、以前から希望していたオランダの地域開発研究所への留学を準備していたところでしたし、それまで米山記念奨学事業に触れる機会もなく、「アジアから日本に留学する学生は金持ちのエリートばかり。彼らを支援する意味が果たしてあるのか」と、その意義にも懐疑的だったからです。それが、長年の夢である留学を諦めてまで事務局長を引き受ける決断をしたのは、ひとえに、この事業に携わる先輩たちの真摯な取り組みに衝撃と感動を覚え、ロータリアンとしての自覚を促されたからに他なりません。

「時代を先取りした改革をしてほしい」。それが、私に期待された役割でした。そのためにまず着手したのは、無風で終わっていた理事会・評議員会を議論の場にすること。それまでのスクール形式からラウンドテ

ーブル形式に変えて、皆の意見を吸い上げるようにしました。さらに、意見を聞く対象を一般の会員と大学関係者にも広げ、奨学会として初めての大規模な調査も行いました。この時の調査結果から見てきたのは、事業の目的が「前途有望で優秀な留学生を支援し、その母国の発展や、日本との平和で緊密な関係の構築に寄与する」こと。貧しい留学生ではなく、優秀な留学生を支援して日本との懸け橋に、というのが、会員の期待であると明確になったことは、先を見越した事業計画を立てる上で、大きな一歩になったと思います。

私は米山の職を離れてからも、いろいろな機関の仕事でアジアの国々を訪問することがありますが、行く先々で、不思議と元米山奨学生たちに出会います。彼らは間違いなく、現在のアジアの発展に大きく貢献しています。その姿を見るたびに、救貧型から知的貢献型へ、この事業が大きな変革を遂げたことの成果を実感します。

寄付金をいただいて事業を行う以上、前例踏襲では廃れてしまいます。変えるべきことと変えてはいけないことを見極めて、変えてはいけないことは守り、変えるべきことは時代に即して変えていかなければなりません。そのプロセス自体に、多くのロータリアンに参加してもらい、会員の意見を反映して決めていくことが何よりも大切だと、私は思っています。

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、(公財)ロータリー米山記念奨学会まで
Tel : 03-3434-8681 Fax : 03-3578-8281 Eメール : mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

学友 2 人が旭日小綬章を受章

平成 29 年秋の外国人叙勲で、韓国とモンゴルの米山学友が旭日小綬章に輝き、12 月に各国の日本大使館において勲章・勲記の伝達式が行われました。元・釜山韓日文化交流協会理事長の朴明欽さん^{パクミョングム}(1983 - 85 / 京都東山 R C)からは「同志社大学の修士課程で学び、さらに博士課程へと進学できたのは、米山記念奨学会のおかげです」。また、新モンゴル学園理事長のジャンチブ・ガルバドラッハさん(1998 - 99 / 山形北 R C)からは「皆さまへの感謝を胸に恩返しの一心得で努めてきただけで、この章は皆さまのものです。今後もご恩を倍々返しできるような力の限り努力していきます」とのメッセージが当奨学会に届けられました。



朴さん



ジャンチブさん

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ⑥

—— 2000 年代 ——

ロータリアンの思いを反映して

1999 年、ロータリアンから多様な意見を取り入れ制度づくりへ生かす「第 1 期基礎調査」を行った結果、明らかになったのは、経済的に困っている留学生ではなく、人物面など複合的な“優秀性”を持つ留学生への支援が望まれている、ということでした。さらに、それまで地区限定で実施していた「大学推薦制度」を 2002 年から全国化することによって、より公正で、より勉学に意欲的な留学生を採用できるようになったのです。改革が進められる一方、寄付金減少による財政難は長期化の様相を呈し、「このまま積立金を取り崩していいのか」「寄付額と奨学生数のバランスが不均衡」「支給金額を減らすべき」といった声も上がり始めていました。

2003 年になると、政府が 1983 年から掲げてきた悲願の「留学生 10 万人計画」が達成され、一層の留学生交流が国策として推進されるなか、米山記念奨学会においては同年夏に実施した「第 2 期基礎調査」、およびフォーラムなどの協議を経て、2005 学年度から奨学生採用数を 1,000 人から 800 人へ。また、奨学金額も平均 7% の減額を決定しました。ただし、資金難への対応にただ追われるだけでなく、新たな展開として、2006 学年度から海外に出向いて奨学生を選考する「現地採用口

ロータリー米山奨学金（海外応募者対象ロータリー米山奨学金の前身）」を、まずはベトナムで試行することになりました。さらに短大・高専・専修学校の在籍者を対象にできる「地区奨励ロータリー米山奨学金」の新設など、さまざまな制度の改編も行われました。

多地区合同奉仕活動としての手続き完了

国際ロータリー（R I）との関係が強化されたのもこのころです。米山記念奨学事業は、ロータリーが目的とする“国際理解と平和の推進”を具現化した活動でありながらも、あくまでも日本のロータリー独自のプログラム。ゆえに、かつては「継子扱いではないか」と嘆く声もありましたが、日本の歴代 R I 理事の尽力により、2004 年 11 月の R I 理事会で、米山記念奨学会が「多地区合同奉仕活動」の手続きを進めることにより、ロータリーの名称およびロータリー徽章を引き続き使用することを認める、との決議がなされたのです。決議文は、「奨学金の授与を通し世界理解と平和に貢献されている財団法人ロータリー米山記念奨学会を賞賛する」という言葉で締めくくられています。

そして 2007 年、34 地区全ての同意書がそろい、日本全地区によるロータリーの多地区合同奉仕活動としての手続きが完了するのです。



米山学友

タイ・ヴァン・ナム さん

出身：ベトナム

奨学期間：2007 - 11 年

学校名：大阪大学大学院

世話クラブ：千里 R C

2007 年 6 月に来日し、まずは日本語の集中講義を受けながら、半年後の大学院入試に備えることになりました。せっかく「現地採用ロータリー米山奨学金」の奨学生に選ばれたのに、合格できなかったら？ との重圧がありましたが、無事に合格。11 年 3 月まで、千里ロータリークラブ（R C）と第 2660 地区の皆さ

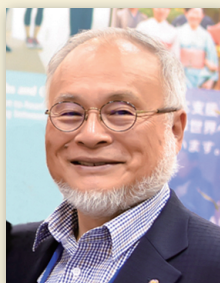
んが手を差し伸べ、困難と一緒に解決してくれたおかげで、博士号を取得することができました。

14 年にはホーチミン市工科大学バイオ食品技術環境学部の学部長となり、現在、同大学応用科学研究所の副所長をしています。ベトナムでは大気や水の汚染が深刻化しており、学生には環境を守り、美しい未来をつくるよう教えています。また、会社を設立し、排水や地下水の分析、大気汚染や騒音の測定、コンサルタント業務などを手掛けています。

ベトナムでは数年前から米山学友が集まり、福祉施設への支援といった活動を続けています。今後も米山学友であることを誇りに、自分の人生と知識を人と分け合い、道を開くことに使いたいと思っています。

寄付金減少に歯止めが掛からず、初の奨学金額の削減、採用数の大幅縮小に踏み切らざるを得なかった 2000 年代。2 度にわたる基礎調査のもと、議論を重ねながら、進むべき道を模索した時代でした。従来にない形の新しい奨学金プログラムを作り、国際ロータリーとの関係強化を図り、「多地区合同奉仕活動」としての手続きを進めました。当時、ベトナムに足を運び、奨学生選考に関わった関場慶博氏と、初の「現地採用奨学生」として来日した米山学友、タイ・ヴァン・ナムさんから話を聞きました。

2017-18年度は
財団設立50周年



弘前アップルRC会員
2004 - 06 年度
米山記念奨学会学務・学友委員
06 - 12 年度 同選考委員
12 - 13 年度 同選考小委員会委員
関場 慶博 さん

私は 2000 - 01 年度にガバナーを務めましたが、正直なところ、米山に対して熱心ではありませんでした。というのも、ロータリー財団の奨学金があるのに、米山があることで日本の寄付金が二分されているのでは？ という疑問の声を耳にしたことがあり、さらには世界中のガバナーエレクトが集まる国際協議会でも、米山の“よ”の字も出てこなかったからです。

そんな私に米山記念奨学会から、学務・学友委員（当時）の打診がありました。“アンチ米山”とまでは言わずとも、不熱心な私になぜ声が掛かったのか、とても不思議でした。が、日本のロータリーが長年取り組んでいる米山記念奨学事業を知る良い機会であり、また、新風を送り込むチャンスだと思い、引き受けることにしました。

より多くのロータリアンから正しい理解と支援を得て、より世界的に価値ある事業へと広げたい。そのためにはまず、日本独自のプログラムである米山記念奨

学事業が、RI から正式な認証を受けられるようにすること。また、従来のように、すでに日本で学ぶ留学生を対象とするだけでなく、経済的事情で来日ができない優秀な学生を世界各国から呼べるような、グローバルな制度を導入すること。私はこれら 2 つのことを熱心に訴えました。

当時の委員や役員と議論を重ね、また、基礎調査と呼ばれるアンケート調査やフォーラムで多くの意見を集約した結果、海外にロータリアンが出向き、選考する「現地採用ロータリー米山奨学金（当時）」の創設が実現し、RI の多地区合同奉仕活動としての手続きも完了。そうした活動に取り組む中で、いつしか私は、熱心な米山の支持者へと変わっていました。

第 1 期現地採用米山奨学生の選考のためベトナムを訪れた時、大学のテラスで熱心に勉強する女子学生がいました。ふとのぞき込むと日本語の教科書だったので、思わず日本語で声を掛けました。

「どうして日本語を勉強しているの？」

「米山記念奨学金の選考試験に応募するのです。ここで採用試験があるので、とても助かります。日本で勉強して、ベトナムの環境をもっと良くしたいです」

そう語っていた時の彼女のキラキラ輝く瞳を見て、やはり現地採用は米山が進むべき道の一つである、と私は確信したのでした。

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、（公財）ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

タイ米山学友会の総会で新役員を選任



現会長からバトンを受けるベッチさん(右)

3 月 17 日、タイ米山学友会の年次総会がバンコク市内で開かれ、タイ学友 17 人と家族、タイと日本のロータリアンや韓国学友会、関西学友会の有志など計 35 人が参加しました。2017 年度の活動報告のほか、4 月からの役員改選が行われ、新会長にベッチ・ポンポーさん（1992 - 94 / 豊橋南 RC）、副会長にカモン・シリチャンさん（1998 - 2000 / 東京城西 RC）、その他 4 人の理事が選任されました。現会長のシュティカーン・テプサンさんから引き継ぎ、第 4 代会長に就任するベッチさんは、「当学友会設立当初の趣旨である、“奉仕活動と日本との懸け橋”を行動方針として努めてまいります」と、抱負を語りました。

米山記念奨学事業 50 年のあゆみ ⑦

—— 2010 年代 ——

震災後に見えた絆 さらに次のステージへ

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の直後から、米山記念奨学会には世界中の米山学友から安否を気遣う便りが寄せられました。国内の学友会はいち早く募金活動を始め、台湾、韓国、2009 年に創立したばかりの中国の各学友会が、多額の義援金を当奨学会に送ってくれました。総額は約 760 万円となり、被災した各地区に送金。その他、世話クラブや地区へ直接義援金を送ったり、ボランティアに参加したりと、行動した学友は数え切れません。第 2 の故郷・日本への彼らの行為は、「日本との懸け橋」を育むという事業の成果を示し、ロータリアンを勇気づけるものでした。

2012 年 1 月には公益財団法人への移行手続きを完了しました。従来以上の透明性や説明責任を果たすことが求められ、その一環として「全国統一の選考基準と評価表」が策定されて、以降、各地区において基準にのっとった奨学生選考の徹底が図られています。

2012 学年度からは「海外応募者対象米山奨学金」の試行をスタート。これは 2006 年制度改編でベトナムを対象に試行した「現地採用米山奨学金」を前身とし、在日留学生だけでなく、より多様な国からの奨学生採用を可能にすることを目的としたものです。6 年にわたる

試行期間を終え、本プログラムは 2019 学年度から、正規奨学金プログラムの一つに加わる見込みです。

ロータリーに活力を与える学友の連携

近年、ロータリアンになる学友が増え、米山学友を中心としたロータリークラブが国内外に創設されています。学友会も飛躍的に増え、海外の学友会は 9 団体、国内の学友会は 33 団体となりました。正式な学友会ではありませんが、ベトナムでも米山学友が集まり、奉仕活動に取り組んでいます。

最近では、個々の活動にとどまらず、学友会同士が国・地域の垣根を超えて連携する動きも出てきました。2016 年のソウル国際大会では、韓国米山学友会と関西米山学友会が中心となって、学友合同懇親会を開催。同様に 2017 年 8 月には、国内外の学友会が実行委員会を組織し、財団設立 50 周年の祝賀として「世界米山学友による感謝 in 熊本」が盛大に開かれました。

東京ロータリークラブ（RC）が米山基金を立ち上げて 65 年、財団設立から 50 年が経過し、支援した奨学生は 2 万人以上。ロータリーから奉仕の精神を学んだ米山学友が力を合わせ、より大きなパワーを生み出し、ロータリーに活力を与えています。次代の鍵を握る米山学友・学友会の活躍にこれからもご注目ください。



関西米山学友会 元会長

ホ ユーツイ
何 玉翠 さん

出身：台湾
奨学期間：1987 - 89 年
学校名：奈良教育大学
世話クラブ：奈良 RC

長い間、米山学友会の行事に参加していなかった私は、初めて参加した総会で「行事に出て恩返しを」との呼び掛けに、怒られているような気がしました。“気持ちがあっても時間がない”。私と同じ思いの学友もいるはず。誤解されている学友の立場からアピールしたいと、その時、心に火がついたのだと思います。

学友会会長になって考えたのは、誰もが主役になり、意見を出し合って企画すること。その過程を皆で楽しみながら準備したソウル国際大会、熊本での米山学友会合同イベントは、各地から大勢の学友が集まり、大成功でした。米山学友は世界中で活躍していて、日本語や共通の話題ですぐに親しくなれます。これからも皆が集まり、世界に貢献できる機会をつくるのが、私の一番の目標です。



ソウル国際大会にて

財団設立 50 周年を記念し、今年度は事業のあゆみを伝えるシリーズを連載しました。最終回となる今回は「公益性」と「学友の連携」の 2 つをキーワードとしてご紹介します。公益財団法人として新たなスタートを切り、米山学友は、国・地域を超えて親睦と奉仕のネットワークを広げていきます。また、米山記念奨学事業の今後への期待を込めて、田中作次元国際ロータリー会長に語っていただくとともに、学友会のネットワークづくりに尽力する関西米山学友会元会長の何玉翠さんに話を聞きました。

2017-18 年度は
財団設立 50 周年



八潮 RC 会員
2012 - 13 年度
国際ロータリー会長

田中 作次 さん

思えば不思議なものです。誘われるままに 36 歳でロータリーに入会したものの、最初の数年は全く面白くなく、そろそろ辞めようかと考えていた時、例会で聞いた職業奉仕の卓話で、私の生き方と人生を一変させました。お金をもらう、もらわないにかかわらず、奉仕とは「人のために尽くすこと」、われわれはそのために生きているのだという話に、目の覚める思いがしました。

それからは進んで人の喜ぶことをしようと心掛け、人に喜んでもらうことが自分の喜びになりました。そして、どんな些細なことでも、人のために尽くすことが、われわれの究極の目標である「平和」につながるのだと気づいたのです。

日本人として 3 人目の国際ロータリー（RI）会長に選出された時、私は迷うことなく、RI テーマを「奉仕を通じて平和を」としました。RI 会長在任中、世界 70 カ国以上を回る中で、ロータリーは真に平和

に結びつく、素晴らしい組織だと改めて実感しました。

日本の誇りである、この米山記念奨学事業も、ロータリーの理想とする国際交流と親善、そして、平和の創造と維持に大いに貢献していると思います。

特に期待しているのは、米山学友会の存在です。私は RI 会長として 2012 - 13 年度に、ベルリン、ホノルル、広島でロータリー平和フォーラムを開催しました。その広島でのフォーラムをきっかけに、ミャンマーで米山学友が集まり、奉仕活動を始めて、昨年ついに学友会が誕生したと聞いた時は、大変うれしく思いました。そのお祝いの気持ちを込めて届けた寄付金を基金として、ミャンマー米山学友会では「田中作次奨学金」を設け、日本への留学を目指して日本語を学ぶ若者たちを支援しているそうです。このような善の循環は、まさにロータリーそのもの。米山記念奨学事業がロータリーの役割の一翼を担い、ロータリー運動の良き理解者となる人材を数多く輩出していることを、とてもありがたく思います。

長年の寄付者としても、この事業は以前よりさらに寄付者の立場に立ち、財政面や情報公開において公正に運営されていると感じられ、信頼が増しています。米山記念奨学事業が健全に維持され、さらに発展して、世界の平和に寄与していくことを心から期待しています。

※米山記念奨学事業、および「よねやまだより」に関するお問い合わせ・ご意見は、（公財）ロータリー米山記念奨学会まで
Tel：03-3434-8681 Fax：03-3578-8281 Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

よねやま
ミニだより

さいたま大空 RC が創立 5 周年！

4 月 15 日、第 2770 地区のさいたま大空 RC の創立 5 周年記念式典が行われました。財団学友と米山学友を中心に結成された初のクラブであり、式典は米山学友のマヘーシダサナーヤカ会長（1995 - 97 / 吉川 RC）の母国スリランカの伝統に由来する儀式や舞踊で開幕し、地区クラブ拡大特別委員長の田村亮夫パストガバナーらが 5 年間のあゆみを振り返りました。同クラブは日本の子どもたちに海外文化を学ぶ場を提供しているほか、ミャンマー、ネパール、スリランカへの教育・識字率向上プロジェクトを実施しています。今後とも会員の国際性を生かし、地区の国際奉仕活動をけん引する力となるよう期待されています。



創立 5 周年を祝って